

● 事例 ●

大学と学生をむすぶ支援メツシユの構築

加藤 大樹

(名古屋大学 学生相談総合センター 特任助教)

はじめに

筆者は現在、名古屋大学において、学生支援のプロジェクトの企画・運営に携わっています。名古屋大学では、平成一九年度より、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」(学生支援GP)に「潜在的支援力を結集した支援メツシユの構築」が採択され、新たな学生支援の試みを実施しています。本稿では、これまでに実践してきた学生支援の取り組みについてご紹介するとともに、新たな学生支援の形を持つ、魅力、可能性、難しさなどについて考えてみたいと思います。

プロジェクトの背景と概要

名古屋大学では、学生相談総合センターを設置し、これまで、学生の多様な相談に対応してきました。臨床心理士が対応する「学生相談部門」、精神科医が対応する「メンタルヘルス部門」、キャリアアカウンセラーが対応する「就職相談部門」の三部門が、学生のニーズに応じた、きめ細かいサービスを提供してきました。平成二一年度からは、「留学生相談部門」も加わり、より充実した支援体制が整えられています。また、兼任相談員として、法律学者、スポーツ心理学者、産婦人科医などが、多面的な視点から学生の多様な相談に応じています。このように、主に個別相談という視点から、個々の学生に応じたサポートを行って

きました。

相談活動を行っていく中で、見えてきた新たな問題もあります。まず、学生の多様化と、その対応の難しさが挙げられます。学生の学力や関心が多様化すると同時に、年齢、経歴、文化的背景なども多様化してきています。このような状況の中で、対人関係の希薄な学生や、孤立する学生が増加している傾向も見受けられました。入学（入口）と卒業（出口）の間で、さまざまな形で「停滞」する学生が増加してきていることが、大きな問題の一つとして感じられるようになりました。個別相談の場にはなかなかつながることができない学生に対して、どのようなサポートを提供できるかということが、重要な課題として浮かび上がってきました。

二つめは、すべての学生に対する予防開発的なはたらきかけです。これまで、当センターが対応してきたのは、主に、学生生活やメンタルヘルス、将来の課題に対して何らかの不安や悩みを抱えた学生たちでした。このような学生に対する支援は、学生支援の核となる部分であり、今後もより充実させていく必要があります。しかし、学生支援をより広い視点で捉えた場合、精神的に健康に学生生活を送っている学生に対して、その状態を保ち、より充実したキャンパスライフを過ごすことができるように援助すること

は、重要な課題であると考えられます。

このような状況に対する対策として、学生相談総合センターでは、新たな学生支援の形を探ることが必要だと考えるようになりました。そのためには、まず、停滞した状態を未然に防ぐための予防開発的な取り組みと、停滞してしまつた学生と大学を再びつなぐ取り組みの、両面からのアプローチが大切です。その一つの形として、少人数から成るグループ活動を複数展開し、それらがメッシュのように連携し合う仕組みを考えました。

このプロジェクトでは、小規模な学生支援の場（グループ活動）を様々に設定し、これらが連携しながら、大学の入口から出口まで、その途上で起こる停滞も含めておおいます。学生生活にまついた学生が、他の学生や教職員と出会うことでひとつのメッシュ（網の目）が結ばれ、それがつながって小さな支援の網になります。さらにこの小さな網が一つの網の目となつて他の小さな網とつながり、大学全体をおおう大きな支援の網となることを目指しています。メッシュをたどることにより、多様な道筋を通つて大学の出口へ、社会へ向かつて行くことをサポートします。

期待される効果

メッシュ (Mes hutes) は、英語の Mesh と、フランス

語の「わたしの仮住まい」という意味のことばから名づけられた、このプロジェクトの愛称です。本プロジェクトでは、名古屋大学における、総合大学としての豊富な知的・文化的・人的資源を学生支援の潜在的支援力と捉え、それらを結集してきめ細やかな支援の網を構築することを目的としています。

この取り組みにより、停滞した状況にある学生（不登校など）の支援や、不適應などの問題に対する予防の効果が期待されます。停滞学生への支援としては、大学の中に新しい居場所（仮住まい）を提供し、学生が支援の網の目の中に入るきっかけをつくります。不登校や不適應などの問題に対する予防としては、グループ活動などを通して、知的好奇心の拡大、新しい人との出会い、リフレッシュの場を提供することによって、大学とのつながりの強化などの効果が期待されます。不登校や不適應という問題を抱え、大学から足が遠のいている学生が再び大学の中に定着し、活躍していくようになるためには、一時的には大きなエネルギーが必要となると考えられます。グループの中で、他の参加者とゆるやかにつながるといふ経験を通して、自身に対する新たな気づきや対人関係を構築していくことにより、エネルギーの補充をサポートすることが期待されます。こうした体験が、本人と大学を徐々につなぐ架け橋

になるのではないのでしょうか。

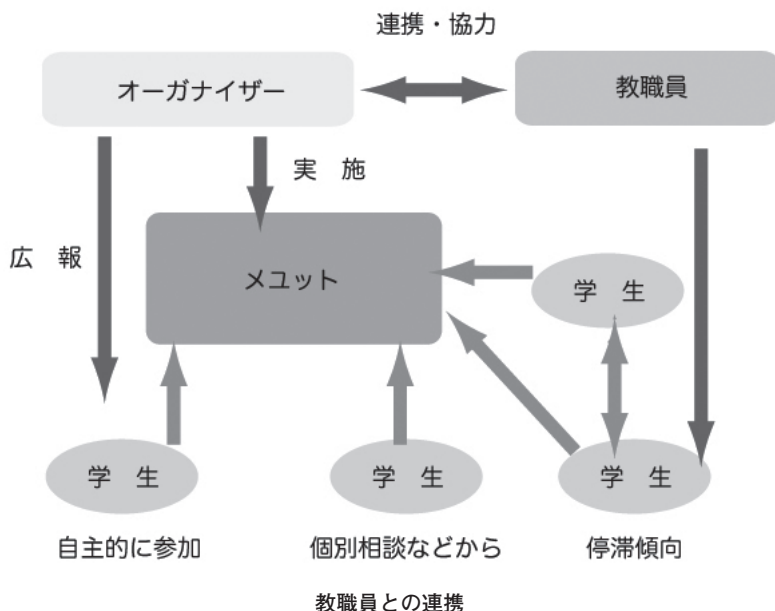
グループにつながるルートづくり

支援メッシュを効果的に構築し、学生のサポートにつながるためには、教職員との連携が不可欠です。本プロジェクトでは、名古屋大学で学ぶすべての学生を支援の対象としています。この中には、学業やサークル活動に積極的に取り組む者もいれば、様々な理由により停滞した状況にある学生も含まれています。そのため、学生によって、メッシュのグループ活動につながるきっかけは多様であると考えられます。

一つめは、学生が自ら進んでグループに関わる場合です。健康的に学生生活を送り、学内のイベント情報などに詳しい学生は、積極的に大学との接点を求めることも多いと考えられます。本プロジェクトでは、筆者を含め、三人のスタッフは、専属のオーガナイザーとしてこのプロジェクトに関わっています。オーガナイザーは、各グループ活動の企画と運営を担当し、学生に対する広報を行っています。学内におけるポスターの掲示、ホームページを用いた案内などを実施しています。各活動の内容の魅力を伝えることにより、学生の知的好奇心や関心を刺激し、活動につながるきっかけを提供しています。

特集・メンタルヘルス②～相談体制・連携・協働～

二つめは、停滞した状況にある学生がグループに参加するケースです。この場合、自ら積極的に参加する学生とは少し異なったアプローチを工夫することが必要になります。学生相談総合センターの個別相談に通っている学生に対しては、学生の興味関心や状況に応じて、グループ活動につなぐ取り組みをしています。停滞した状況にある学生にとって、急に大学生活に戻ることは困難な部分も大きいと考えられます。しかし、個別相談における一対一の対人関係から、メユットのグループ活動につながるものが、他者と関わる体験への橋渡しとして機能することが期待されます。一方で、停滞した学生のすべてが、個別相談の場を訪れるわけではありません。このような学生に対しても、周囲のネットワークを活用することにより、支援の網の目に入るきっかけを提供することが重要です。友人や、指導教員をはじめ、本人と関わりのある人物が媒体となることにより、メユットとつながることが可能になるのではないのでしょうか。さらに、日頃の学生の様子をよく知る教職員と、オーガナイザーが連携・協力することにより、それぞれの学生に応じた適切な支援のきっかけを提供することができます。



グループ活動の実際

本プロジェクトでは、停滞学生の支援と、学生に対する予防開発的支援を柱としながら、複数のグループ活動を展開します。このグループが、相互に関わり合いながら支援メッシュを構築することにより、大学全体を包み込む学生支援の体制が整備されると考えています。これまでに実施してきたグループは、大きく分けて三つのカテゴリーに分類されます。

一つめは、「表現を媒体としたコミュニケーション」を目的としたグループです。この中には、たとえば、「コレクション自慢の会」、「フラワーアレンジメントの会」、「多文化アートの会」などがあります。自分の趣味やコレクションについて、ゆるやかなつながりの中で語り合い、フラワーアレンジメントなどの表現を通して、体験を共有します。また、多文化アートの会では、日本人学生と留学生と一緒に、コラージュなどの様々なアートを媒介して交流します。様々な媒体があることにより、自然な形で交流を促進することが可能になります。

二つめは、「リフレッシュ・自分の可能性を探す」ことに関するグループです。ここには、「自然散策の会」や「産業なんでも見学会」などが含まれます。自然散策の会では、

学内の総合保健体育科学センターの教員と連携し、ハイキングなどを楽しみます。幅広い層の学生や教職員が参加し、リフレッシュの機会になるとともに、相互の交流の機会にもなっています。「産業なんでも見学会」では、様々な産業の現場を見学し、産業やそこで働く人たちの魅力に触れます。将来を考えるにあたって、自分の興味や可能性について考えるきっかけにもなると考えています。

三つめは、「知的関心・興味のひろがり」に関するグループです。この中には、「海岸生物を見る会」、「キャンパス探鳥会」、「足モトを見る会」などがあります。「海岸生物を見る会」や「キャンパス探鳥会」では、学内の博物館の教員と協力し、海の生物やキャンパス内の野鳥の観察などを行います。「足モトを見る会」では、学内や名古屋市内にある身近な石材や化石などの観察をします。これらグループの魅力は、専門家と一緒に観察することにより、様々な専門的な知識をわかりやすく共有できることにあります。こうした体験を通して、大学という場の特徴を活かして、個人の興味や関心を拡大できると考えています。

グループ活動を通して見えてきた効果

実際にグループを展開していく中で、様々な学生と出会い、関わってきました。そうした中で、本プロジェクトに

よる具体的な効果も見えてきました。停滞学生支援と、予防開発的援助という二つの観点から、プロジェクトによる効果を整理してみたいと思います。

停滞学生支援という点について、個別相談からメユットのグループにつながる学生の数が徐々に増えていることが挙げられます。学生相談総合センターには、様々な心理的問題や葛藤を抱えた学生が訪れます。個々の悩みに応じて、相談員が対応をしています。継続的な相談を進めていく中で、人間関係を拡大することや、大学の中で活躍の場を広げていくことが重要なテーマになってくるケースも多く存在します。このような場合、相談担当者やグループの担当者で連携をとりながら、対象となる学生のニーズに応じて、個別相談からグループにつながるという活動を行っています。個別相談の場でゆっくりと自分自身と向き合う体験と、グループの中でゆるやかに他者とながら体験の両方を通して、様々な心理的な効果が得られていると考えられます。各グループでは、保障された枠組みの中で自然な形のコミュニケーションをすることができそうです。こうした体験は、自分自身に対する自信や、人と関わることに對する満足感などにつながります。また、グループにおける体験をその場限りのものにするのではなく、それを共有したり振り返ったりすることができるような工夫をしています。体験を

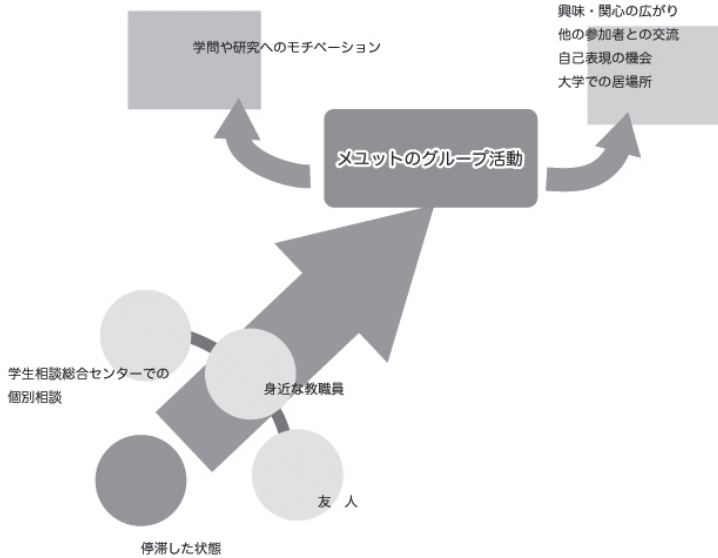
記録し、保管できるようなポートフォリオを準備したり、SNS上のコミュニケーションを活用して、メンバーどうしが体験を言語化し共有できるように仕組みを用意しています。

このようなシステムをうまく活用しながら、グループによる内的体験を自分の中できちんと振り返るといふプロセスが生じやすくなるのではないかと考えています。

次に、予防開発の視点としては、たとえば、学部や研究科を越えたつながりという効果が挙げられます。メユットのグループでは、総合大学という環境を活かして、文系理系を問わず、様々な分野を専攻する学生が集まってきます。このような環境の中で、自分自身の興味関心の広がりや、他者との関わりを通じた気づきなどの効果が認められています。また、大学内での居場所づくりや、将来について意識する機会としての効果も見えてきています。とくに、就職活動や大学院入試などを控えた学生や、卒業期の学生にとっては、自分自身の関心や特性を見つめ直し将来像について考える機会は重要であると考えられます。

これからの課題

本稿では、名古屋大学における学生支援プロジェクトの取り組みについてご紹介し、実践の中から見えてきた効果について考察をしてきました。大学にとって、これまでに



本プロジェクトによる効果

ない新しい試みであることから、様々な難しさや課題もいくつかあります。まず第一に、教職員のみなさんとの連携・協力を大切にしていくことが重要だと考えられます。取り組み自体について広く知ってもらおうと同時に、大学の構成員一人一人がコミットしやすいような環境を整備していくことが重要な課題となるのではないのでしょうか。このように、学生支援の輪を全学に広げていきつつ、個別相談とグループ活動を包括するような学生支援の形を整備していくことが将来の目標になると感じています。

さらに、こうした取り組みを行っている、またはこれから実施していこうとしている大学は全国にたくさんあると思います。同じ目標を持った大学どうしが情報交換などを行うことにより、それぞれの大学の個性を活かした学生支援の新しい形を模索していくことが可能になるのではないのでしょうか。名古屋大学における取り組みは、まだ始まったばかりですが、様々な方と連携・交流しながら、このプロジェクトを今後も大切に育てていきたいと思えます。そして、将来的に、学生支援の種が芽を出し、大学という広いフィールドにしっかりと根を張って成長していくことを願っています。